様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　23　年　3　月　31　日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究　(C)
研究期間：2009　～　2011
課題番号：21520253
研究課題名（和文）ジョン・ディーの一次資料に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Research on John Dee's Writings and Manuscripts

研究代表者　横山　茂雄　(YOKOYAMA SHIGEO)
奈良女子大学・人間文化研究科・教授

研究者番号：10144726

研究成果の概要（和文）：英国エリザベス朝の学者ジョン・ディー(1527-1608)が1582年から協力者のエドワード・ケリー(1555-1597?)と共におこなった魔術作業に関して、『神秘の書』の翻字刊本と直筆手稿の双方に依拠しつつ、特に初期の段階に焦点をあてて、「聖なる」知識、情報が具体的にどのような方法で開示されたのか詳細に分析した。

研究成果の概要（英文）：This research analyzed in detail how the 'secret' knowledge was revealed to John Dee and Edward Kelley, drawing upon both the transcriptions and the manuscripts of the records of the magical actions they started in 1582.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：英文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：英文学、エリザベス朝、思想史、魔術、オカルティズム

１．研究開始当初の背景

(1)エリザベス朝の学者ジョン･ディー John Dee (1527-1608) については、彼のあまりに複雑で多面的な活動のゆえに、いまだに評価が揺れ続けて、定まっていない。

(2) 1960年代から70年代初頭にかけて、フランセス・イェーツ Frances Yates は、*Giordano Bruno and the Hermatic Tradition* (1964) 以降の一連の著作において、イギリス･ルネッサンス期におけるディーの重要性を強調し、知的巨人、「万能人」だと規定した。

こういった イェーツ による評価は大きな影響を及ぼし、彼女自身の *Rosicrucian Enlightenment* (1972)、彼女の弟子 Peter J. French が書いたディーの伝記, *John Dee: The World of an Elizabethan Magus*(1972) を代表格として、70年代にはいったん定着した感があった。

(3) だが、1980年代後半以降、イェーツ のルネッサンス史観及びディー評価は、後続の研究者たちから厳しい批判に晒されることになった。ディー評価の見直しについては、特に Nicholas Clulee の *John Dee's Natural Philosophy* (1988) が大きな役割を果たした。

また、Christopher Whitby, *John Dee's Actions with Spirits* (1988) は、それまで未刊行だったディーの重要な手稿の一部を翻字して注釈を施したという点で少なからぬ意義をもつ。その後、Deborah Harkness の *John Dee's Conversation with Angels* (1999), Hakan Hakansson, *Seeing the Word* (2001)、Stephen Clucas, ed., *John Dee* (2006) など、様々なアプローチによる新たなディー 像への模索が続いている。

しかし、21 世紀に入っても、宗教、魔術、科学、文学、政治が渾然一体となっていた時代においてジョン・ディーが占めていた位置についての決定的な研究はまだ欧米でも出現していないというのが現状である。いっぽう、日本においては、管見の及ぶ限りでは、ディーの研究者は皆無に近い状況が長年続いている。

(4) 本研究代表者は、1990 年代後半からジョン・ディーの研究への取り組みを開始し、ディーとその協力者エドワード・ケリー Edward Kelley (1555-1597?)が 1582 年からおこなった魔術作業に焦点を絞って、研究を進めた。その結果、2001 年から 2003 年にかけて、3 本の論文を発表したが、諸事情から他の幾つかの研究プロジェクトに専念する必要が生じたため、2004 年以降は中断を余儀なくされてきた。本研究はそれを新たに再開して、ジョン・ディーの一次資料の綿密な調査を通じて、いっそう深化させるものとして着想された。

２．研究の目的

(1) ジョン・ディーを研究する際に大きな問題となるのは、彼の遺した著作や記録文書が、その内容面で難解をきわめるだけでなく、いまだ手稿のままで未翻字、未刊行のものがかなり存在することである。さらに、翻字刊行されている場合でも、厳密な校訂を経ていないものが少なくなく、テクストの信頼性に乏しい。これは本研究の対象であるディーとケリーの魔術作業において、とりわけ顕著である。

(2) 本研究では、ディーが遺した魔術記録とその関連文書、特に中核を成す『神秘の書』*Mysteriorum libri* を、翻字刊本と手稿の双方を参照しながら、正確精密に読み解き、ディーとケリーが「聖なる」知識、情報をどのようなかたちで開示されたのかを可能な限り具体的に解析検証することを目的とする。

３．研究の方法

(1)ディーがケリーと協同でおこなった天使あるいは精霊の召喚作業の厖大な記録『神秘の書』は、一部は散逸したものの、大部分は手稿として今も現存している。

(2) 『神秘の書』のうち、1583 年 5 月 28 日以降のディー直筆の手稿記録は、大英図書館 British Library において Cotton Appendix XLVI, 2 Vols として保存されている。また、この記録は、既に 17 世紀に、メリック・カソーボン Meric Casaubon の編集によって、*A True and Faithful Relation of What Passed for Many Years between Dr. John Dee and Some Spirits* (1659)として上梓されていた（以下、同書を *TFR* と略記する）。

(3) いっぽう、1581 年から 1583 年 5 月 23 日までの記録は、大英図書館において Sloane MS 3188 として保存されている。これは手稿のまま長らく眠り続けていたが、400 年以上経過した 1988 年になって、Christopher Whitby, *John Dee's Actions with Spirits*, 2vols. としてようやく翻字された。同書は博士論文のタイプ原稿をファクシミリ印刷のかたちで極小部数刊行されたものである(以下、同書を *AWS* と略記する）。

(4)『神秘の書』関連の手稿としては、他に、大英図書館において、Sloane MS 3189、Sloane MS 3191、Sloane MS 3189、MS. Add. 36674 として保存されているものがある。

(5) ディーの『神秘の書』手稿は、夥しい数の欄外書き込み、多くの図表、絵などを含んでおり、*TFR* や *AWS* のみを資料として用いるだけでは、精霊召喚作業、魔術作業の全貌を正確に把握することは困難である。

(6) したがって、本研究では、ディーのオリジナルの魔術作業記録の手稿群を、大英図書館からマイクロフィルム及び電子スキャンファイルの形態で入手し、それを翻字刊本と対照しつつ、解析検討することで厳密なジョン・ディー研究の基礎固めを目指す。特に、解明されていない部分の多い 1581 年から 1583 年 5 月 23 日までの記録（手稿では MS Sloane 3188 に該当）に焦点をあてる。

４．研究成果

(1) ①Sloane MS3188 は『神秘の書　第１書』*Mysteriorum Liber Primus* と名づけられたものから始まって（最初の日付は 1581 年 12 月 22 日）、以下第５書まで続き、*TFR* に収録された記録に先立つディーの精霊召喚作業の実態が詳らかになっている。

②ディーが精霊召喚に用いた方法は、スクライング scrying と称されるもので、水晶、及び、水晶のなかにヴィジョンを見る能力者(スクライアー scryer) を必要とする。西欧の中世及びルネッサンス期のスクライングあるい

はクリスタロマンシー（水晶占い）の記録と比較するとき、ディーの採用した方法には特に独創的、特異な点は見出せず、伝統にほぼ忠実に従っていると考えられる。ただし、中世のロジャー・ベーコン Roger Bacon などの光学魔術の系譜をディーが強く意識していた可能性も存在する。
③ディーは早くも 1579 年の時点からスクライングをおこなっていたと推定されるが、Sloane MS3188 に最初に登場するスクライアーはバーナバス・ソール Barnabus Saul という人物である。しかし、ディーはこの人物への信頼をやがて失い、作業は頓挫をきたした。この直後、1582 年 3 月 8 日にディーの前に現れたのが、エドワード・タルボット Edward Talbot という人物である。彼はスクライアーとして卓越した能力を示した。なお、タルボットの本名は実はエドワード・ケリーであるが、それが明らかになるのは後の 1582 年 11 月 7 日のことである。

(2) ①1582 年 3 月 10 日におけるディーとケリーの最初のスクライングで、ケリーはウリエル Uriel を称する天使あるいは精霊を召喚することに成功した。ウリエルは「聖なる卓子」Holy Table や「神の印章」Sigillum Dei の作製法について、ケリーを通してディーに指示を与えた。
②1582 年 3 月中旬から下旬にかけて連続しておこなわれた召喚作業では一気に厖大な量の情報が天使から開示された。かつまた、これらの記録を仔細に分析するとき、作業の実際面に関する幾つかの事実が明らかになる。たとえば、召喚作業は夜間にだけおこなわれたのではなく、ディーとケリー、あるいは精霊の都合にあわせて、午前、午後、夜間を問わず、一日のいずれの時間帯でもおこなわれていた。また、召喚作業はもっぱらディーの書斎で実施されたが、完全に遮蔽された環境ではなく、作業中に他の人間が入ってくることもありえた。
③1582 年 3 月 20 日及び 21 日の召喚作業では、以降の作業全体に特に大きな意味をもつ重要な情報が天使からもたらされた。このときの主たる天使は、ミカエル Michael を自称していた。情報の開示は文字群、文字列を用いたもので、非常に複雑な手順を踏んでいる。
④3 月 20 日、ミカエルはまず 7 つの聖なる天使の名前を教えてから、後は 7 種類の動物のヴィジョンを与えた。これらの動物はそれぞれ羽根などに 7 つの文字を帯びており、合計 49 の文字群が得られるが、ミカエルはこの文字群を 7 文字ずつ 7 列に書き出し、そこから 7 つの天使の名前を抽出するようディーに指示した。
⑤翌 21 日には、ミカエルは別の 49 の文字からなる文字列を与え、縦横あるいは対角線に読むなど 6 つの方法を指示し、ディーは 42 の天使の名前を得た。かくて、20 日の分と合わせて合計 49 の天使の名前が開示された。これらの名前のうち、聖書で言及されるものは多くない。いっぽう、中世やルネッサンスの西欧魔術に登場する名前も含まれているが、同時に、他には見出せない名前、発音不能の名前も含まれている。また、開示方法自体に 7 の数秘学的意味が強調されているのは顕著である。
⑥以上の天使の名前によって、ディーは、3 月 10 日に製作の指示が開始された「神の印章」のデザインを完成させることができた。これは非常に複雑なもので、たとえば、17 世紀にアタナシウス・キルヒャー Athanasius Kircher が作成した同種の印章と比較すると、その点は明らかである。とりわけ、外周円の帯に配置された文字と数字に埋め込まれた天使の名前は、アルゴリズムを用いた一種の暗号に近く、後に開示される「エノク語」Enochian language との関連からも、注目される。なお、*AWS*, *TFR*、その原本手稿のいずれにおいても多くの図が存在するため、ディーとケリーの召喚作業は視覚的要素に富んでいるような印象を与えがちだが、実際には、図もすべて天使の言葉に従って構築されたものに他ならない。このようにもっぱら言語に依拠している事実は、召喚作業の解釈において非常に重要である。
⑦4 月 28 日に開示された「創造の 7 つの印」Seven Ensigns of Creation、及び、翌 29 日に開示された「49 の善なる天使」の両者については、その意味、用途は天使も指示を与えておらず、解明は困難である。ただし、前者は錬金術、特に賢者の石の生成方法に関係があるのかもしれない。

(3) ①1582 年 3 月から始まったディーとケリーの召喚作業は、しかし、同年 5 月 4 日を最後に半年以上中断する。そもそも作業の最初からディーとケリーの関係は良好とはいえず、お互いに強い不信感をもっており、諍いが絶えなかったのだが、5 月初旬にそれが頂点に達したためである。また、これには天使がケリーに対して結婚を命じたことも絡んでいる。いずれにせよ、中断にいたる過程を検証していくと、ケリーがディーを食い物にした詐欺師にすぎないとする従来の一般的な見解には大きな疑義が生じる。
②ディーとケリーがいちおうの和解に達し、召喚作業が再開されたのは 1582 年 11 月 15 日である。11 月 21 日の召喚作業では、「卵くらいの大きさで、明るく煌々と輝く透明な」水晶が天使からディーに与えられ、以降、召喚作業の水晶のひとつとして用いられた。そして、翌 22 日にケリーが旅行に出かけたため、作業は再び中断する。

③10 日間の予定だったケリーの旅行は結果的には数ヶ月に及び、召喚作業が開始されるのは1583年3月23日のことである。したがって、1582年5月から1583年3月までの期間、ディーは天使から僅かの情報しか受け取れなかったことになるが、この時期、ディーは航海、探検の事業に航海術、地理学の権威として深く関与し、探検家のハンフリー・ギルバート Humphrey Gilbert、エイドリアン・ギルバート Adrian Gilbert、ジョン・デイヴィス John Davis らと密接な関係にあった。さらに、この時期、ディーは金銭的にきわめて逼迫した状況にあったと推測される。
④1583年3月23日から翌4月にかけての召喚作業記録によって、ケリーの主たる旅行先がコツウォルド地方に位置するブロックリー Brockley という小さな村であったことが分かる。そして、同地の丘において、彼が発見したのは、巻物、錬金術書、錬金術の秘薬であった。錬金術の秘薬は、「赤く凝固したもので、くりぬかれた石に入っていた」という。ディーの錬金術の実験に関する記録は僅かしか残っていないが、以上の事実からすると、ケリーとの召喚作業においても錬金術は重要な意味をもっていたものと推測される。
⑤巻物についていうと、それは未知の文字から成る文書及び謎めいた 10 葉の絵から成り立っていた。文書のほうは簡単な置換法に基づく暗号で書かれており、ディーは 4 月 11 日には解読に成功した。文書はデーン人がかつて隠匿した埋蔵金の在処を示すものと判明し、5 月 8 日には、天使の指示に従って、ケリーは埋蔵場所と思われる 11 の土地に向かって出発、いっぽう、5月25日には、ディーは政府からの発掘許可を得ている。しかし、その後、紆余曲折の挙句、埋蔵金の発掘は失敗に終わることになる。
⑥いっぽう、83年3月下旬からは、前述の探検家エイドリアン・ギルバートが召喚作業に参加を許されていた。彼はディーとケリーの召喚作業に加わった最初の外部の人物である。エイドリアン・ギルバートはイギリスの航海史に名をとどめる人物であり、彼が魔術にも関心をもっていた事実は非常に興味深い。
⑦さらに、83年5月1日には、ポーランドの宮中伯オルブラヒト・ワスキ Albert Laski がロンドンに到着し、イングランド側はその意図を測りかねたものの、エリザベス女王以下、宮廷はこの貴族の歓待に努めた。ただし、ラスキは、来訪以前の3月18日に、人を介してディーとの接触を試みており、来訪目的のひとつがディーとの会見であった可能性は高い。なぜなら、ラスキはかねてから錬金術やオカルティズムに強い関心を寄せていたからだ。
⑧ラスキとディーが初めて出会うのは、5 月 13 日のことで、この際にはレスター伯が同席していた。さらに、同月18日にはラスキはディーの居宅を訪問した。そして、翌月の6月19日には、ラスキはディーとケリーの召喚作業に参加した。いっぽう、この時期、ケリーは官憲による捕縛の危機にさらされていたとディーは 6 月5日に記録している。また、7月4日の記録からは、ディー、ケリーがラスキと共にイングランドを離れる計画が進行していたことが推測できる。7月12日以降の召喚作業記録は欠落しているため、ディー、ケリー、ラスキの間で具体的にどのような相談がなされていたかは不明であるが、9月21日、彼らは大陸へと渡るのである。

(4)ディーがケリーと共におこなった精霊召喚作業に焦点をあてた学術的研究としては、依然として、Deborah Harkness, *John Dee's Conversation with Angels* (1999)があるのみなので、本研究はその点で少なからぬ価値を有するであろう。また、日本国内では、ディーの研究はほとんど進捗していないので、後続の研究者に対して大きな刺激となるだろう。

(5)本研究の成果の一部は、研究社出版(東京)より単行書『神の聖なる天使たち』（仮題）として刊行されることが既に正式に決定しており、順調であれば平成24年度内に刊行される予定である。これによって、本研究は社会への還元の責務を果たせるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）
①横山茂雄、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書、『ジョン・ディーの一次資料に関する基礎的研究』、50頁、2012

６．研究組織
(1)研究代表者
横山　茂雄（YOKOYAMA SHIGEO）
奈良女子大学・人間文化研究科・教授
研究者番号：10144726